慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シンポジウム「映像を使う社会学」
Sub Title	
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2021
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.26 (2021. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 映像を使う社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20210703-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム 「映像を使う社会学」

岡原 正幸

シンポジウム 「映像を使う社会学」（2020 年 7 月 4 日 15:20~18:00）

- 報告 1：**松尾浩一郎** (帝京大学)
  社会調査データとしての映像
- 報告 2：**土屋大輔** (株式会社セガ)
  映像を使った調査表現の実例「レプリカ交響曲≪広島平和記念公園 8 月 6 日≫」
- 報告 3：**吉川侑輝** (立教大学)
  エスノメソドロジーにおける映像
- 報告 4：**プルサコワありな** (慶應義塾大学大学院)
  映像作品「皮膚」―アートベース・リサーチの視点から―

コメンテーター：**鈴木弥香子** (日本学術振興会特別研究員 PD（立教大学）)・**木下衆** (慶應義塾大学)

2020 年度は、コロナ禍の中、オンラインによる学会大会となりました。新学期当初から慣れぬ映像記録配信技術でなんとか授業を行ったり、受けたりしてきたわけです。フィールドワークや聞き取り調査など社会学の調査実践も足元から掬われました。大会休止の提案もありました。しかし、会員、幹事、慶應義塾大学の皆様のご尽力で、オンライン会議システムを利用し、一部の参加者は三田キャンパスに設置されたシンポジウム会場に集い、まさにハイブリッド（ハイフレックス）な体制で行うことができました。

さて、テーマは「映像をつかう社会学」、社会学の新たな手法、それもリサーチというプロセスの全般にわたって、そのプロセスのどこかに映像を利用する試みについて考えようと企画されました。このシンポジウムが開催されたほぼ同じ時期に、「アートをつかう社会学」と帯に銘打たれた書物を、私の編集で、出すことができました。『アート・ライフ・社会学　エンパワーするアートベース・リサーチ』です。アートベース・リサーチという全く独自の試行を進める立場で、アートをつかう社会学が人と人を繋ぎ、互いにエンパワーするという出来事を扱っています。今回のテーマも、この大枠の中で企画されました。なので、広島平和記念公園で撮影された素材を利用したビデオ・インスタレーションだったり、自画像ともなる映像作品が今回の報告には出されています。

しかし「映像をつかう社会学」は、このアートベース・リサーチよりずっと古くからありました。写真、動画の映像によって記録されてきた社会や人や事件は膨大ですし、それを利用する社会学的な試みも多々ありました。だいたい、エスノグラフィやフィールドワークといった報告で、写真を一枚も用いていない論文のほうが今や少ないかもしれません。また、

エスノメソドロジーは対象となる現場にビデオカメラを持ち込み、その記録素材から、そこで行われる相互行為的実践の形式性を詳細に記述してきました。

今回のシンポジウムでは、社会学的な作業の中で、いかに映像が利用されてきたのかを再確認する意味もあります。それは、新たな映像の時代を迎える際の心構えを作るためでもあります。新映像時代が手元にあります。たとえば、このシンポジウムがオンラインになったということは、実は、学会大会が映像化されたということでしょうし、人々は、いとも容易く、瞬時に、低コストで、映像を手にするようになったのです。現実があって、それを映しとる映像があるのではなく、映像という現実が私たちの社会を構築していると考えるべきかもしれません。映像をつかう社会学自体が、映像でもあり得るのです。再帰的な映像社会のなかで、むしろ社会学はどうあるべきかが問われているかもしれません。

当日の風景
東館ラボおよび zoom による大会運営